

八代市立博物館未来の森ミュージアム

友の会だより



2024
Vol.3

寒中お見舞い申し上げます。会員の皆様におかれましては、お元気で新春をお迎えになったことと存じます。
本年も友の会活動につきまして何卒ご支援・ご協力の程よろしくお願い申し上げます。

- p.1 冬を感じる館蔵品紹介 《草廬三顧図屏風》
- p.2-3 休館中の博物館活動 改修工事が始まりました！／収蔵庫整理は新たな発見に満ちている
- p.4 学芸員調査日誌から「百済木地蔵堂」参詣と旅文化



を感じる
館蔵品紹介

《草廬三顧図屏風》

すぎたにせしやう
杉谷雪樵筆 明治15年(1882)

カラーは
こちらから



草廬三顧図は、三国志の劉備玄德(りゅうびげんとく)が諸葛孔明(しょかつこうめい)の草廬を三度訪問し、軍師になることを請うた故事(三顧の礼)のワンシーンを描くもの。

本図に描かれるのは、劉備らが2度目の訪問に向かう場面。冬の寒さ厳しく雪が降りしきる季節のこと、張飛(ちょうひ)は不満を訴えますが、劉備はこのような時であるからこそ自分たちの気持ちを通じると言い、諸葛孔明の廬(いおり)へと馬を走らせます。しかし、劉備らはまたもや諸葛孔明に会うことができず、その後三度目にしようやく諸葛孔明を軍師として招き入れることに成功するのです。

本図では画面左手前に劉備一行のみを描き、右奥のかなたにいるであろう諸葛孔明の草廬を暗示させています。背景の多くを余白とし、また松樹の上部をぼかすことで、広がりのある空間と冬の冷たい空気感が表現されています。屏風には引手痕があり、もとは襖絵だった可能性もあります。

作者の杉谷雪樵は、幕末に活躍した熊本藩御用絵師。杉谷行直の子で、はじめ矢野家六代・良敬に学び、中国宋元画や日本の古画を研究して独自の様式を確立しました。明治維新には藩の禄を離れますが、明治20年には再び旧主細川家の庇護を受けて上京し、宮中の御用をつとめるなどの活躍をしました。

参考文献：図録「杉谷雪樵 熊本藩最後のお抱え絵師」
(熊本県立美術館編集・発行、2000年)



休館中の博物館活動

改修工事が始まりました！

周知のとおり当館は改修工事のため 7 月 1 日より休館しております。前号では、改修工事に向けた準備の一環として収蔵庫整理や展示室撤収の様子を紹介しましたが、今号ではいよいよ本格的に始まった工事の様子を写真とともにご紹介します。

【館内の養生作業】

工事に入る準備として、まず館内のありとあらゆるところの養生作業が行われました。養生とは、工事で館内を傷つけないため、床などを保護する作業です。当館にはエントランスの妙見祭人形模型をはじめ備え付けのガラスケースが数多くありますが、あっという間に頑丈な養生が施されました。



2 階 エントランス



1 階 第 1 常設展示室

【天井等の撤去作業】



2 階 講義室

エアコンや照明器具などを取り替えるために、天井が一時的に撤去されました。天井裏の作業が終わった後に復旧されます。

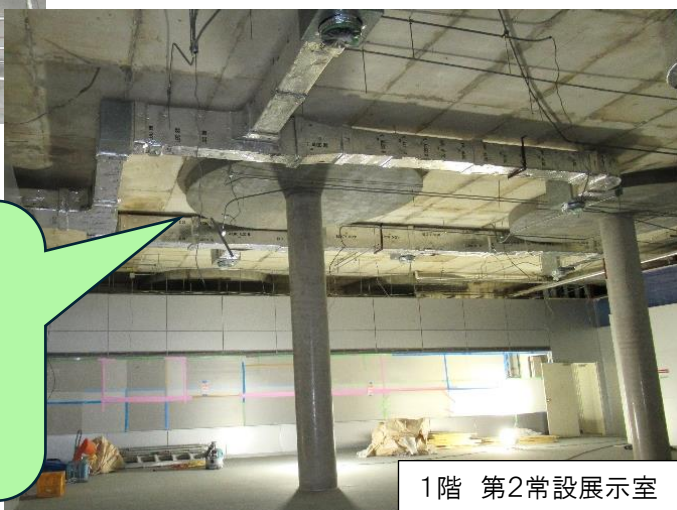
講義室のエアコンは、全館空調から切り離され、個別に運転ができるようになります。

すご〜い！



こちらも同様に天井が一時撤去されました。

2階の床を支える円盤（直径 3.6 メートル！）が今だけ現れています。



1 階 第 2 常設展示室

ご注意

工事中は博物館敷地内に立ち入ることができません 

現在、当館駐車場には現場事務所が建ち、工事車両が出入りしているため、関係者以外の駐車場利用および敷地内への立ち入りができません。当館職員に御用のある方は、まずはお電話にてご相談ください。ようお願いいたします。(博物館 ☎0965-34-5555)



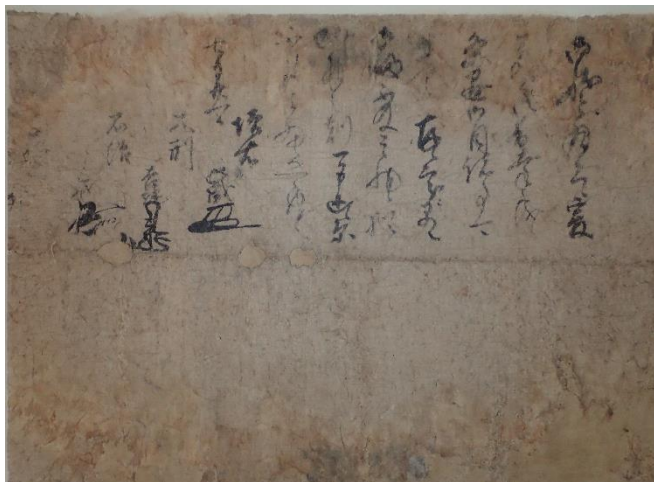
大変ご迷惑をおかけいたしますが、ご理解・ご協力のほどよろしくお願い申し上げます



収蔵庫整理は新たな発見に満ちている

改修工事に備え、収蔵庫の整理をしていたところ、見なれない古文書があったので、手に取って見てみると、石田三成・大谷吉継・増田長盛の三人を差出人とする書状ではないですか。しかも、関ヶ原合戦の約二か月前に書かれたと考えられる内容で、署名部分には、増田長盛がうっかり付着させたと考えられる指紋が見受けられます。ご存じのように、石田三成・大谷吉継・増田長盛は、家康に対抗した西軍のリーダーたちで、敗戦により吉継は関ヶ原の陣中で自刃、三成は捕縛のうえ処刑、長盛は高野山に追放されました。残念ながら宛名は摩滅し読むことはできませんが、「会って話しがしたい」と記されていることから、宛名の人物を味方に引き入れるために書かれたものと推察されます。天下の行く末をかけた三人の緊張感が伝わってくる書状です。

この書状は、三十年前から八代市立博物館の所蔵品として収蔵庫にあったものですが、私はその存在に気づかず過ごしてきました。収蔵庫整理をしていると、このような発見の連続です。再開館したあかつきには、再発見した所蔵品を皆様にお見せできればと考えています。(林)



増田長盛の
指紋だ！



「百済来地蔵堂」参詣と旅文化

当館学芸員 石原浩

●坂本町・百済来(くたらぎ)地蔵堂の由緒



百済来地蔵堂は、球磨川の支流である百済来川の上流にある。『葦北百済来地蔵尊縁記』によると、6世紀、韓半島にあった「百済」の国王に仕えた日本人官僚・日羅(にちら)が父の火葦北阿利斯登(ひのあしきたのありしと)に贈った地蔵菩薩を、後世の宝亀元年(770)に堂を建ててまつったのが当堂の始まりという(現在の本尊は江戸時代の作)。境内には日羅の碑があり、毎年4月24日に地蔵祭りを開催、多くの参詣者で賑わっている。

●本堂を埋め尽くす墨書の謎！

本堂を見渡すと、壁面が墨書で埋め尽くされている。令和5年2月、文化の力で坂本の復興を応援するボランティアグループ「さかもと山里巡り編集室」のメンバーとともに、私はこの壁面墨書の調査を実施した。赤外線カメラで撮影した200枚以上の画像を解析、肉眼では判読しがたい文字も含め300件以上の銘文を解読した。するとこれが単なる「落書」ではなく、寺社参詣の「記帳」に相当する宗教行為であることがわかった。



解読半ばではあるが、現時点での最古の記録は文政9年(1826)、最新のそれは昭和44年(1969)。参詣の理由は「無病息災安全」「武運長久」など。西南戦争で無念の死を遂げた家族を供養するための参詣もあったようだ。参詣者の出身地は、八代、芦北、宇土、熊本、玉名など有明海や八代海沿岸に多い。さらに海を隔てた天草や長崎、遠く大阪中之島からの参詣もあった。いずれも「港町」として栄えた都市である。海運業に携わる人々、八代の経済発展に寄与した商人たちの姿が見えてくる。



●日本人の旅好きは寺社参詣から！

参詣ルートを推察してみよう。熊本、益城、八代などからは「薩摩街道」を利用した徒歩の道。一方、長崎、島原、天草からは「船」を利用、徳湊港、日奈久港、田浦港、佐敷港などを経由して参詣したに違いない。また、「日奈久入湯より御堂へ参拝仕り候」という墨書は、参拝者が日奈久温泉に立ち寄った証拠。寺社参詣と温泉旅行がセットになっている。パック旅行の先駆けである。

八代焼窯元の上野氏によると、百済来の豪商が日奈久に建てた温泉旅館が何軒もあるとう。また、百済来と縁のある旅館の女将は「昔は子供を連れて日奈久から百済来まで3時間かけて歩いた」と語ってくれた。その証だろうか。百済来地蔵堂の天井画の多くは日奈久の商人が奉納したものである。

江戸時代の庶民は、関所を通る「通行手形」の入手が困難で自由に旅することはできなかったが、お伊勢参りなど「寺社参詣」が目的なら容易に取得できたという。一端手形を手に入れば、目的地まではどの道を通ってもよかった。こうして寺社参詣の前後に観光名所を巡る旅のスタイルが確立。日本人の旅好き、温泉好きは、寺社参詣にルーツがあるようだ。

